

# 男性の立場からの 男女共同参画

京都大学大学院教授  
伊藤 公雄 さん



“男らしさ”などユニークな男性問題の研究で知られ、男性学の視点からジェンダーや男女共同参画について提言をされている伊藤公雄先生に、男性の立場からの男女共同参画についてお話を伺いました。

## 根強い男性主導型社会

少子高齢化が急速に進んでいる現在、日本が継続的な安定・成長を維持するには男女ともに仕事と家庭がバランスよく運営できるワーク・ライフ・バランスの充実が不可欠ですが、現実にはなかなか浸透していません。その原因の一つは、社会が強固な男性主導社会になっており、この枠組みに慣れてしまった男性がその問題点に気づきにくくなっているためです。

大学生の就職試験を例に挙げると、成績では女性の方が上位でも採用数は圧倒的に男性の方が多くなります。これは国際的にみると「優秀な女性の力を活用しないなんて、もったいない」ということで、ダボス会議(世界経済フォーラム)などでも、日本の女性の経済活動への参加率の低さが日本経済低迷の原因のひとつだと指摘されています。

もうひとつの原因は、日本の経済成長が1970年代以降「男は仕事・女は家庭」という構造によって支えられてきたということです。確かに、「長時間働く男性労働者と安いパート労働をしながら家庭を支える女性」という構図は、効率や生産性という点ではきわめて有効でした。しかしこの構図は近年、さまざまなひずみを生み出しています。

## 「らしさ」に縛られる男性

日本では毎年数万人が過労死で亡くなっているといわれ、その大部分が男性です。また、中高年男性の自殺も急増しています。その背景には「男はこうあるべき」という概念に縛られ、悩みを誰にも相談できず一人で背負い込

でしまう男性の姿があるように思います。

男性を仕事に縛る生き方は個人としての時間を奪い、仕事以外の生き方を見失わせてしまいます。不在がちなことで家庭内での居場所を失い家庭が崩壊したり、何十年も懸命に働いた揚げ句に行き着くのが「定年うつ」や「夫在宅ストレス症候群」だとしたら余りに空しいです。男性主導社会を担ってきた男性にとっても、「男はこうあるべきだ」という「男らしさ」の縛りは今や重荷になってきています。男性にとっても、仕事以外の面で自分の人生を豊かにし、仕事と家庭・地域生活のバランスを取り戻すことは喫緊の課題ではないでしょうか。

## 「みんな」のための男女共同参画社会

「ワーク・ライフ・バランスの推進」と言うと、経済の停滞を心配されがちですが、ワーク・ライフ・バランスは男性だけのものではありません。埋もれていた女性の能力を活かし、社会参画・労働参加の機会を拡大することで、不足する労働力を補うことが可能です。少子高齢化の進む今こそ、男女ともにワーク・ライフ・バランスを実現できる社会が永続的に維持・発展できる社会といえるでしょう。

男女がお互いの人権に配慮しつつ、社会生活、家庭・地域生活のあらゆる場で能力や個性を發揮し、共に助け合いながらバランスよく生活できる社会、これがつまり男女共同参画社会です。「男女共同参画社会の形成」はともすると女性のためのものと思われがちですが、男性にとっても生きやすく、あらゆる世代に求められる社会のあり方ではないでしょうか。

プロフィール  
伊藤 公雄  
京都大学大学院教授

1951年生まれ。1976年、京都大学文学部哲学科(社会学専攻)卒業。京都大学文学部助手、神戸市外国語大学講師・助教授、大阪大学人間科学部教授などを経て京都大学大学院文学研究科教授。内閣府男女共同参画会議基本問題調査会委員、大阪府・京都府・滋賀県男女共同参画審議会会長などを務める。  
著書:「<男らしさ>のゆくえー男性文化の文化社会学」「男性学入門」「女性学・男性学ージェンダー入門」「男らしさ」という神話」など

# 男性の生き方を考える

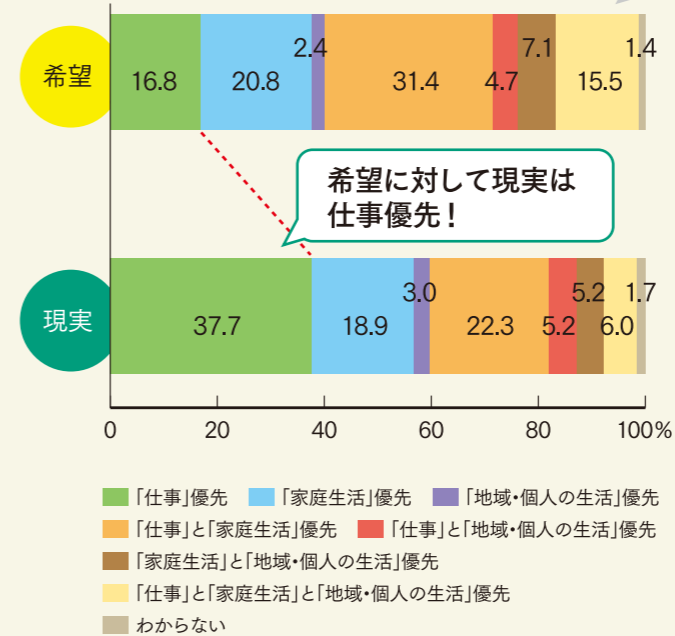
## ～男性にとっての男女共同参画とは～

男女共同参画社会は「女性の社会進出を促進する社会」で、どちらかというと「女性のためのもの」と思っていないですか!?

しかし、いまだに根強い「男は仕事・女は家庭」という固定的性別役割分担意識は、今や男性にとっても社会全体にとってもマイナス要素となっています。男性の性別役割分担意識がもたらしている現状と、男女がより暮らしやすくなる社会について考えてみましょう。

仕事も家庭も個人の生活も大切にしたい!

仕事と生活の調和に関する希望と現実 (回答:男性)



## ワーク・ライフ・バランスの希望と現実

「仕事と生活の調和に関する希望と現実」調査結果によると、希望に反して「仕事優先」となっている男性が多く、「仕事も家庭生活も大事にしたいけれど、現実にはそうはいかない」という現状を示しています。

人は年齢や環境などによって、仕事(ワーク)を充実させたい時期、家庭生活など(ライフ)に重点を置きたい時期は変わってきます。しかし、理想と現実の間にはまだまだ大きなギャップが存在しているようです。



残業が長く、急な出張も多いので家族とコミュニケーションが取りづらい。たまの休日にも家に居場所がない感じで落ち着かない。(40代・会社員・男性)

## 市民の声



育児のための時短勤務制度はあるが、実際に使うのは難しい。育児を応援する雰囲気職場にない。(30代・団体職員・女性)



家族といるのは苦痛。仕事をしている方が楽なので定年後のことを考えると不安。(50代・会社員・男性)